

夕刻、茜色の空に小学校から流れる蛍の光になぜか胸が切なくなっていた小学時代、あの頃はまだ豆腐屋さんが得意の笛を鳴らしながら自転車で住宅街をまわっていた。

短大1年の頃、高校時代通学で利用していたチンチン電車がその使命をまっとうした。ガタガタと揺れる車内と木製の板、ガラス窓に揺れる工場と街の景色が結構好きだった。

24歳の頃、親友の一人が死んだ。自殺だった。女友達3人、酒とジュースとつまみとお菓子を買い込んで皿倉山の頂上まで登って死んだ彼女の話をした。みんなで笑ったり泣いたりした。その時皿倉の頂上から見た夜景は死んだ彼女と登った時に見た夜景と同じだった。

あれから5年、高速道路が枝光まで延びて、通り慣れた3号線も近代化してもうすぐ車も空を飛ぶんじゃないかと思わせる景色に変貌した。スペースワールドに観覧車が出来た。皿倉山にスキー場が出来た。もし今死んだ彼女が現れたらこの街の変わり様に驚くだろう。今この街で暮らしている私でさえ、この街の超スピードの変革に時々怖さを感じる。

彼女が死んで1年位ほどの道を車で走っても「そういえばここであんな話をしていたなあ。」とか「この道を理由もなくブラブラとドライブしたなあ。」と思い出しては目頭が熱くなっていた。しかし、時間が経つに連れそうゆう気持ちも徐々に薄れ、彼女のことを思い出す時間も少なくなっていた。かといって彼女のことを忘れてた訳じゃない。いつも思い出す宝箱には彼女がいる。時間が私に自分らしい自分を取り戻させてくれたのだと思っている。ただ少し悲しいのは彼女との思いでの場所が少しずつ崩されていくこと。

私は現在、約1時間のかけて職場へ通勤している。その時お気に入りのポイントがいくつかある。帰り道（行きは焦っているので風景を楽しむ余裕があまりない）、小倉方面から戸畑バイパスを登り切った時、目の前にそびえ立つ皿倉山。そこからバイパスを降りきる前の新日鐵の巨大な溶鉱炉、そしてライトアップしたスペースワールドの観覧車。

仕事がきつくてグッタリとしながらの帰り道、しかしその帰り道に私の癒すべきモノがあると感じていた。

ある日の帰り道、夕暮れ時、オレンジをおびた薄い雲が空全体に広がっていた北九州プリンスホテルから中間に向けての道の途中。ゆるい坂道を上る頃、木々に囲まれた巨大なマンションが夕暮れの空に雄大に映えていた。マンションの窓の所々には明かりが灯り、夜に入る一歩手前の紫とオレンジのグラデーションの空にとてもマッチしていた。ソレを

見た瞬間、私は「ああ、綺麗だなあ。」と思った。何年もその道を通ってきたのにその美しさに気付かずにいた。私は不思議に思った。しかし考えてハッと気付いた。

時が経ったのだと。

そのマンションは私が高校時代に建てられた、十数階建ての横広いマンションで立体駐車場の屋上部分には緑が咲いていて当時では最新のタイプのものだった。

しかし私にとっては慣れ親しんだ風景とは違っていた。が、10年という時が周りの風景と同化していき、ソレが私の自然の中の一部と化したのだ。

ある、ウイスキーの宣伝の文句でこうゆう台詞がある。

『何も足さない、何も引かない』

今、大事なのはそこではないだろうか。

戦後、日本は追いつけ追い越せの勢いで世界でもトップの位置に着いた。しかし、水俣病や、死の海洞海湾など犠牲も多く払った。地球の1日の回転速度は何億年前から変わらないのに時代のスピードはドンドンと速くなっている。もうそろそろここらへんで、時代のスピードをゆるめてやらなければならないのではないだろうか。

新たに造るのもういい、今ソコにアルものに目を向けてみては？と。

新しいモノを自然に同化させるのは時間がかかる。しかもソレが自然の風景の中に溶け込む前に壊し、また新しいモノを造る。

そんなことはもう止めにして、ソコに存在するものに目を向けていきたい。

例えば、廃線になったチンチン電車の線路。映画のスタンドバイミーのように誰もが線路を伝って小さな冒険をしたかったはず。

私が小さな頃、誰もが友達同士で空き地や裏山に基地を作っていた。しかし今は工事中の空き地や私有地につき立入禁止ばかりで、蔓や木で作ったブランコを掛けるめぼしい木すら見当たらない。みんな、トムソーヤの友達のハックみたいに木の家に憧れていたはず。

子供時代を昭和に生きた私は北九州を昭和に還れる場所にしていきたい。

「あっちもこっちも変わって何がなんだかわかりません。」

という様な街よりも

「懐かしいなあ。」と言われる様なすこし古くさい場所にしていきたい。

無理にフローリングの床に座るよりちゃぶ台にお茶にせんべいをおいて畳の上にゴロンとできるような街と言うよりも町にしたい。そしてお菓子メーカーの戦略によってくすぐられる子供心ではなく自然な形で子供心に還れる町にしたい。